



みち 古道が紡ぐ物語



二つの都を結ぶ古代官道・下ツ道①

～平城宮跡（奈良市佐紀町）から郡山下ツ道ジャンクション（大和郡山市八条町）まで～

奈良盆地を南北に縦断する3本の古道の一つ、下ツ道。古くは藤原京と平城京を結び、その一部は平城京の中心を貫く朱雀大路と重なっています。都が京都に遷されて一度は廃れた下ツ道ですが、中世以降には奈良町と郡山、田原本、橿原、五條をつなぐ「中街道」としても大いに賑わいました。そして今年3月22日、京奈和自動車道と西名阪自動車道をつなぐ郡山下ツ道ジャンクション（JCT）が開業。再び脚光を浴びている下ツ道を題材に、紡がれた歴史の一端を描きます。

歴史の息吹を現代に伝える下ツ道沿道の風景

■下ツ道は拡幅され平城京の朱雀大路に

上ツ道、中ツ道と並ぶ、大和盆地の主要な南北道路であった下ツ道は、藤原京・平城京という古代の都の基準線となった。

和銅3（710）年、元明天皇の勅で新たに遷都された平城京の朱雀大路は、下ツ道に重なるように建設された。現在、平城宮跡（奈良市佐紀町）には、壮大な第1次大極殿が建っている。天皇の即位や元日朝賀、外国使節の歓迎式典が行われたとされる建物で、2010年の平城遷都1300年祭に合わせ復元工事が進められた。復元にあたっては、当時の建築様式を忠実に再現しながら、構造安全性を両立するため、リニアスライダーや積層ゴム等、最新の免震技術が盛り込まれている。

朱雀大路は、大内裏の正門である朱雀門から平城京の入り口である羅城門までをまっすぐに結ぶ。下ツ道を拡幅したその道幅は70メートルを超える。これほどの規模の道を敷設した理由は、朱雀大路での天皇の閲兵や外国使節の送迎を通して、内外に権威を示すことにあったと考えられる。

都が京都に遷ったことで平城京は衰退し、中世以降は若草山のふもとが東大寺や春日大社・興福寺といった寺社の門前郷として隆盛。朱雀大路が荒廃するにつれて、下ツ道のルートは中世以降東にずれ、奈良町を起点とした「中街道」となった。

現代の街並みに朱雀大路の面影はほとんど残されていないが、1998年に復元された朱雀門の前

には朱雀大路の一部が復元され、また平城京の南限にあたる羅城門跡（奈良市西九条町）は緑地として整備されており、かつて平城京の玄関口として数多くの人々を出迎えたことを伝えている。

■佐保川の植樹を主導した川路聖謨^{としあきら}

失われた朱雀大路の代わりに、佐保川沿いに南下するのも情緒がある。奈良市中心部を流れる佐保川は万葉集にも詠まれるなど古くから親しまれ、現在は桜の名所としても知られている。

佐保川の桜並木の中に、「川路桜」と呼ばれる樹齢160年を超える古木がある。桜並木の植樹を主導した奈良奉行・川路聖謨^{かわじとしあきら}にその名を由来す



復元された第1次大極殿（奈良市佐紀町）（左）

復元された朱雀門と朱雀大路の一部（同）（右）



羅城門跡を示す石碑が立つ西九条緑地（奈良市西九条町）（左）

る。奈良奉行として病人や窮乏者を救い人々から愛された川路は、その後幕府の要職を歴任し、ロシアから日本を開国させるため訪れたプチャーチンとも交渉した。帰国後のプチャーチンに「ヨーロッパでも珍しいほどのウィットと知性を備えた人物」と評された、幕末きっての能吏であった。

■郡山下ツ道 JCT 開業で県全体の活性化に期待

佐保川と秋篠川の合流点付近から、下ツ道は佐保川と重なり、その後は下ツ道に重なるように県道が整備されている。下ツ道沿いの県道を南下すると、稗田町や番条町（ともに大和郡山市）といった環濠集落の趣を残す町を通過する。さらに南下すると西名阪自動車道をくぐる。

2015年3月22日、ここに郡山下ツ道ジャンクション（JCT）が開業した。奈良盆地を東西に走る西名阪自動車道と、南北に走る京奈和自動車道とが高規格道路で結ばれることで、交通の利便性が高まり、企業立地や観光客の集客等の効果が期待されている。

しかし、京奈和自動車道木津 IC（京都府木津川市）～郡山下ツ道 JCT 間を繋ぐ大和北道路の開通時期は未定であり、スムーズな移動を実現する上でのボトルネックとなっている。京奈和自動車道がその名の通り、京都・奈良・和歌山を繋ぐ交通インフラとしての役割を十分に果たすには、なお時間を要すると思われる。（次号に続く）（太田宜志）

佐保川沿いの川路桜（奈良市）（右）
（写真提供：公益社団法人奈良市観光協会）



番条環濠集落（大和郡山市番条町）（左）



郡山下ツ道 JCT 料金所（大和郡山市八条町）（左）



高架の下を通る道が、JCT 名の由来となった下ツ道（同）（右）

下ツ道沿道の地図

